



天坐り支那も竟不へ天理自然の事に附れ
道はわづ。莊老ありて局儒をくづて祖師禪坐て文
字のは跡を傳るる人智障^{ヨシマツ}の弊のにつき
がゆくちう^{フタリ}智無^{シム}と云ふと云ふ。仰て^{カク}育^{カク}木ねをあく
聾^{フタリ}に聾^{カミ}と見ゆ。當機益物^{ヤシラ}とて。林て^{カミ}木^{カミ}ハナニ
信そ^{カミ}き^{カミ}へかづる者伏淑^{マサニ}方使^{カミ}す^{カミ}極^{カミ}爲^{カミ}ハ他^{カミ}
方使^{カミ}す^{カミ}と強^{カミ}危^{カミ}と喝^{カミ}一^{カミ}殺^{カミ}君^{カミ}と云ふと云ふ。人
育^{カミ}乃^{カミ}林聾^{カミ}の事たり。常の人^{カミ}へ見ひて^{カミ}見^{カミ}たす
なり。れせ極^{カミ}爲^{カミ}の愚^{カミ}よも^{カミ}がへき^{カミ}教^{カミ}、活國平天
下の今^{カミ}時^{カミ}に^{カミ}見^{カミ}ゆ。城^{カミ}後^{カミ}のう^{カミ}冬^{カミ}の事^{カミ}らす也。

は然上人曰達上人の内體冷然の修行を推究する
了活義參和乃は体は塵よろそ。南都の炭乃僧
往は儀へりかひ王侯の豈歎にわざう。公卿の桂
廻よ參て邪魔を撫て神輿と据れ奉をあへて
御本と勅へりさうの衆會にも甲冑を掌り
うちの步行も手ねどよりて我執經懶都て佛
制よもすりと食歟強盜ゆて袒風とて被給され
ハ俗怪をとゆるに據ちく佛はまがう魔滅と
唯徹因明りるのみ。一實因衣も更きゆとは卑
俗乞下の男女には恥よ難体綱よりて逞罪因

みみら。殺盜せりとびらる故よ。易行易修の淨業
を弘めうては教よつめ。佛縁としうげあくと
ハヌ無修也。度おが。我慢とく。うんろよ。無聲黒衣
内戒ゆて法道の身操をもく。惡行を乞う。唐
て瘞脣於學り行作とす。是時我お魚
ナリ。然るふ又其易行のあま。祖志のつまをふ
らむ。唯よ軽力れよあへて。大を因がひけを毀つ
し。婆娑中飯の教と萬と傳は。唐度の役を
本とす。送魚と您つす。文永弘安のは。京鍾倉の
傍傍。妄慚妄愧の形狀圓もあくと見。是にうそ

日蓮師釋はを爲て。四箇の名言と云ふ。古事記の傳
号と一系の經教は留へられて。事相の三千を要
陀羅ニ移して。は後は後の中興とあり。是より
は藏の折を揚げん。折伏の利鉄と稱すべし。
兩師乃至は。はは久後の大下令とけよの傳矣。而
あり。是時よりて。益物やりすと傳さるの教也。
幸也。一統の法天文明の人に即給りければ。お無の
神化とぞゆ。無れり。せらの盡有とぞ。計
考有めく。礼せの所へ。故にかと。奪ひんがち。おのれの者すと。然
對と。ひそひ。裏返道うるも。壁ハ。一先拂う。ハ。併す。用ひ。あらぬの事。兼
る。う。往來も。だま。本から。は。自り。其の二種の。一は。將うち。其
世ノ。れ。無とも。づり。おほ。ト。幸也。まよ。おも。おも。を。被す。と。こそ。不

市道を引ひきもるねぢう。今附文附の附はまちの附の附ひよへりま
すれ候傷のそとをハリイの附をもとす。候まのま事ハ今ノ附とさう
がて社附ハシテ社附ハシテ社附ハシテ社附ハシテ社附ハシテ社附
端アシテ社附ハシテ社附ハシテ社附ハシテ社附ハシテ社附ハシテ社
賛往のまよもじくう勧めにて他よつとよよとは
教られざるゆゑ下の魚人を放きへと極くとて經
文を引蒲団と探して晝午れゆうそて魚人アリ助
うきし本とうとくればいふの魚よ深やといた。またの
物くこと老くもハ里本巻きとて歸依傷作とうゆ
家門の弊害是るよか」とぞうて。汝身に犯れと
しきひ。凡行放持のあらむ。汝くふ多。年これ
もひく。利買而毛の損失ハ高まどぐる多也。糸程

乃ち梅へ包て入ればさうすきの姿令にて仕事。又
より作工を海と。支割を新ねよ仕事の什物と人
あれど沾却と二十年前まことに事奉奥を引ゆ
主とすぐれく扇をかゞし。やうて外見へせられ
ははへ裏表をそと見せさんと拂ふとつりひきと
引合を晝中はあり後から扇よす清端豫乳抱
手の匂は假あ作の怪衣わまにゆくもで左佐
の名れうめぬすにわす。千円の白眼万指乃指不
されど。西人の脚うるはのうへ。われどもとよもく
たとげお仕事にあらうと

俗すもあらじもあらじもあくて神儒佛一致すである
ハ故也を立形狀へ信がりの近様にむし神化の事多
肉食をもじりて善く理もまれぬ者。皮膚をもえず
乱世の財産亦々不純の者居と榮ほど立ますと。
後世平安の代より衣服といふと。うべ改めざるなり
日本の内すも耶蘇と曰く柳木有りや能事の
業すか。余すも。聖經よも。日本。費。重本の義
櫻。日本。うべ改め。と。庶民の嗜好もまた年を天子と
憂ふ大丈あわべか。

向こうべ極悪人念佛詔勅を誕生感化に一空

○金拂ニ

ちりすりと音曰め経は生めんとむれと
先達うははてよきれへはまく高拂とももあが
きるまのとたう事にへあひ。それゞとおのの安ふ
乃あてよへきしに往生とくらみへ別とを。ばうおふ
往生せぬがとく。まよ拂とせびとを寧ましめ。暖方
そ仕合終ものめ。安樂累報とやれ事とく事
たり。千万人よ一人ぞうれと齋セイをもるに處まわる。
極あくつとすのと地獄の界カタマリとあくらへ縁て
地獄。若人ハシメと清ヒカルと極まなす。ああゝ唱名す
極まへりとらひとへ金拂ねつまを地獄へすく

金仏を間の
さうす
うへ興婆即寂光。あふき。詔固でうしづんとせ
ハ難目杖よつそ永沉エイシン。わざり。千中五之一
陰陽不測の事えををすれの神よと様とつ事
なし。日月乃玉般糞ヒツク。アア。でざくさく歎ハラハラきを以て
かく。今自和光薩摩のどよとわづくま神ハ人
間乃本と曰く。血渴様クルクルをとづく。人真中をま
別る侍水とわづく。火を清シキ。今日のわづくみーと
湯をゆづく。長命と澤カネ。呪ナガマ。在様カネと紅血を
見。淫祀エヌス。月水と紅血の様す。炎のけ。日

生氣が昌すまつた。先生會へまづ湯也神也。
死殺は地うり陰也鬼也。陰も陽也と根本と枝て
太陽の神氣にはまづるも也故に宿也と夕也
の火を用ひと。宿也とて昨日汲一升を替ふ。其
中後湯又不ころ理たり。其如よ序つまてハ移も
かく様もあらず。大割の陰湯生れをみて。陰を移
湯を生じとみう今日乃移すなり。俗傳云神は見
直さざらば世のうるやハ氣と水をもす。すみうるをば
ウル神靈はもつとも言ひての事す。如一真もうらうも
そかのうけきとゆうとゆうい般和をともしきうだり。ゆま
じけきとはうるや日と水を離縛のゆめハえくまのう
月年一列ぬらへ併ヌ解一うちバ是人のもせ

多うとす。西へのもと。西へとぞ親教主教大付
寂滅かんじゆの業の公儀。教義の説教。教義の威儀。
やされまつあらわす。あはれてめに西へなるも。彼の
佛はの傳化よりあはれ。佛はの傳化より内ふよ
きてする惡業の種がうすぐへまんさうの人ひ希
あり。欲心にすまくほく。嗜根へ日くは嗜。根をす
べり人てあでくせば。別よ佛はのせりあくめす
ぢモナ。せのるよあまうはまれて今日の天照大
神の店まつはせば。小至のやへうて廢絆を正
もくとて世の後も。人の罪歎とすすげしもハ神

化の開く。日本は未だりて、まことに眞信不二
と立れ。俗神をへりてして、すてふ形をう。夜
を事ひて、もがへはせのまき。今まで、りつて、
今まに、なせ。ゆめりう。衣を擣て、せよ。顎を
丸めく。をよやう。うそい。たまでもあす。ふまく。あら
はざれ者の太歟。う。その歎うはを殺。奴。世人て、ゑ
とゆわう。こり。年う。

儒もまたかくの、俗儒の記章。のぼる。唐人乃
日本にて儒は師と云ふ。教化をさう。儒
者多く。西土より。而も泥て。日本。の國故。も。損益。と

勅教。せひすもの。まうち。那の。ほうち。ひう。と。折
みじ。偏屈。ちう。一せれ。と。世。一。東の。十家。へ。儒も。教。こ
そ。ま。ね。其理。ひづ。り。と。う。て。天皇。の。あく。よ。が。し
は。う。と。方。後。経。と。ゆ。う。て。用。ゆ。う。こ。そ。甘。ず。る。ゆ。中
ま。の。傷。う。体。り。聖。人。と。神。と。け。人。間。の。わ。せ。と。直
ゆ。て。今。ま。と。安。寝。か。ド。う。ん。と。あ。か。う。、れ。ど。も。歌。い
う。く。歌。ひ。じ。う。る。を。よ。へ。わ。く。ま。う。見。す。人。乃。亂
貨。から。神。や。伴。ア。聖。人。の。神。物。の。俗。神。と。い。せ。れ。物。ま
ら。の。先。天。地。の。介。を。ま。て。急。明。る。物。致。知。と
破。も。耳。も。否。み。陰。湯。不。測。そ。一。の。く。へ。六。吉。辛

われへゆき。一財を惜そ奉来あわきがりうれ
精す。又今と秋ハ一よりかへてとらへうど。
うは極て多く人ア不敵よ。親類アくら。どく不
主と憐し。欲のうそくやん。我のひうそぬやうに。也
ふをされねやうに。貧とまづらぬやうに。の世間経
り。うがりをと。我も欲もやくこまよハア。と。
道程よ。その名。よと。事。うそく。の欲。う
ま。所。次。は。ふ。う。その人。内。く。圓。じ。う。も。う
やく。ふ。と。つ。ま。と。子。共。を。賺。う。と。も。う。と。ハ。世。あ
ひ。ま。と。能。う。と。一。ヨ。リ。う。と。我。う。や。あ。バ。死。人。日。

金。う。代。を。く。と。合。意。ま。い。佛。で。も。神。ま。く。人。で。も
す。水。一。日。も。あ。け。と。へ。う。き。う。せ。の。勝。され。と。燈
え。消。ま。の。火。か。く。は。ほ。か。く。へ。切。か。く。と。そ。れ。ば。と。想
う。火。か。く。や。う。れ。水。の。ま。る。う。れ。と。い。福。う。れ。と。欲。と
色。と。秋。と。人。間。の。體。よ。つ。づ。る。用。乃。ゆ。う。と。れ。り。と
き。れ。の。道。に。そ。し。う。よ。そ。れ。ハ。方。を。そ。そ。め。か。ゆ。と。是。よ
根。く。を。ま。や。い。よ。教。へ。う。き。を。う。き。め。か。ゆ。と。是。よ
と。り。不。う。人。く。か。く。死。ゆ。へ。う。か。く。も。く。る。り。の。也。
それゆ。ゆ。く。角。か。れ。お。く。精。を。く。教。へ。ま。と。
圓。く。の。寛。社。ま。社。修。を。考。へ。形。容。と。立。ま。と。參。祖。

ア不淨犯罪を犯すて清潔の人をしてる客を絶
アら。勅若懲惡我神徳よりもつて月の奉乃
神社の御靈氣をりとおまえそれもしくより神氣を
立はる一向りをかくへ足取子ト、すがふ太已貴
事代主素盞雄精因賣。宇迦ノの神、ヒ女神の神
祇に無くとありありして。理當今也多氣の神をさき
から。悉神像とあ卯並々奉られ。ば少神の聲聞
を被付よ盛られ。我國のえと彼のの聲とする。ば
石翁と云。唯一一家ほりわ前利物乃神祇と云
て。其供元下と被りとす。旧志の事あひ日左右

日本の風化ノ序アハ。今ノ事ニモ多ニ其の幣帛ア
ハ後ノムニモト御莫アエラ。而テ印旛やニミ。今ノ事
ニリ社トニモテ勿シ。たゞナシテヒヌ田島ヨド耕
シ人ナキジヘサクシム。あ級トアヒヒニ儒のりウ
トモキレドモマ罪相性ナシカシヤ。天主ハ夜麻
キツヤウ。また那の夜麻^{スガミ}よりて益々我國神を潔
ミ那モ於天主^{スカイ}ニ除^{スル}。我之神乃モ像^{カタ}ニ立^{スル}何
の様也。ハ百萬社ハ廟^{ビハ}ナリ。廟ハ貌^{カタ}ナリ^{カタ}散
ナリ能^{スル}考^{スル}
神奈^{ミタマ}の天狗^{スカイ}を御^{スル}多^シ參^{スル}。序轍^{スル}多^シ

強たり。彼隼人そよとへと如かし大國おほのさと井の松林まつやをより阿アと
思おもふす。思おもふす。神かみ乎よはの社やしろより社やしろれと如かえ
りと化なま舞まい。戯あざえもひつまの社やしろより社やしろれと如かえ
う社やしろを圓まんく如かくに舞まい廣ひろくらばあみ御アマミ神かみより至アリ
乃ハ御ミ小ち仕しををるもん。天あま物ものの制せい作つくりハキヒ舞まい太おトトも
御ミ乎よにわらわら舞まいちち。二ツ見み乃ハ浦うらの舞まいスシけを舞まい
を舞まいと云いふ合あひひて舞まいすすハ二ツ見みとつま
を舞まいうななづづ。

神かみの荒あら魂たまとハ陽ひの體からだ氣き、和わ魂たまとハ陰ひの體からだ氣き
主ぬしとハ月つき八や日ひよよ、翁おきな翁おきなの後あと水みずありあり土ど地じ乃ハ神かみよ

翁おきな翁おきな湯ゆありあり火ひあり

天地人の天地の天あま照あらわ大おほ神のかみ、天地の天地の素す盞さな雄お、天地の天地の天あま照あらわ大おほ神のかみ
素す盞さな雄お有有、人ひと乃ハ天あま照あらわ大おほ神のかみ、人ひと乃ハ素す盞さな雄お、人ひと乃ハ天あま照あらわ大おほ神のかみ

五行氣化の神

天あま照あらわ大おほ神のかみ、人ひと乃ハ天あま照あらわ大おほ神のかみ、人ひと乃ハ天あま照あらわ大おほ神のかみ

人ひと五ご行ぎょうの神

天あま照あらわ大おほ神のかみ、人ひと乃ハ天あま照あらわ大おほ神のかみ、人ひと乃ハ天あま照あらわ大おほ神のかみ

造化陰陽の天地の

伊佐諾イサノ神みこと

海うみ國くに乃ハと君きみ之の氣化也

外官造化の神アマミ乃ハ產うぶ。豐受トヨスルの名なハ五行ご食く蓄こ乃ハ神かみ

ウテ水徳ナリス月乃神

圓常立
太中主

月讀ノ人神

形化出生

諾無の或神の人神トモリ

日神ナリ

月神ナリ

陽の名 氣也ナリ

日神ナリ

月神ナリ

陽の名 氣也ナリ

月讀ハ

月讀ハ

陰ノ名 形化ナリ

陰中陰

陰中陽

八ハ陰數の極

八極ハ四方四隅ナリハハ六十四四季七德地三界
陽數九九ハナート天一の水ニ降

我國神乃變化純陽純陰ナリ。偏陰偏陽
ウニ陽の効極ナリ。陰乃靜ナリ。紙生し。陰の靜

ナリ極ニ。陽乃動也。陽中の陰。陰中の陽ニ通
て神出。圓出故ア。太陽乃火德の内宮乃天照大
神ハ女神也。日の天也。外宮太陰乃水徳の神ハ
男神也。月也天より。陰陽降昇。水火和合
て萬物自育。單に火單の水ハ憇て物生セ。火の
中の水ハ。水の中の火も相生。水の中火也。火の中
の水も相生耳。不測の妙ナリ。是神と秘ニ。乃
乎地ナリ

主空の地祇觀音。日本ノ者乃祀セ。世活也。之
百万遍ノ念佛が不度ノ行持。又增羅の御

物と弘法大師も祖師へ極樂の夏草の遊女事
ふう縫被へと縁の客を求る事。縫被も相と佛
のまゝにまゝ祀せり縫被も相と別無より。
されど祀せも佛は本尊も仏はと縫被され。日本
乃神の祭祀にうそをす。單くもろやゑへてと被
いすれり能を刹うりうりと至れ。更に御身もくわら。
大師と訣する茶師へとくれど佛の御身は御身。御身と
宿主の神と歎て佛のねねよ精を飯の付技お
ぐのうじば神く乃ぞすい何とやす。ば神の
えふへにれかすや。我骨肉筋脈とえほづる胞胎

の神と參秋林の下にてて。先祖の神へ飢渴なる
全心の神とならざる事。うちとひく事は辟くる也。
去程よそのまへ辟く。云詮うて。血脉と佛並より
生と。併は亦よ佛く。血脉の理の相異をひそむ。三因
妄想の教にて。人の境界へゆく事のねねと
も。唯佛祖の血脉と佛するを形寄して血脉相
承く。ゆきう。其いは門のさう。以祖の妙旨、成達
すあれ。ばの器。授むれ。あ。余お續もべき事。すと
機。一器のみ水と湧き灌の家事。すと。全般もそ
傳授もあらず。信男信女のあづく事。すと。全般もそ

ちれども俗の中にも厭離釋土乃念ふつゝ。一心不
れの行業あり。ばあくよ身を捨る輩に其後方
の廢業者とて被縕廻血脉乃部數づくや下には脈
を略してうけよる事もあらずと近世へ而後院業
うち五臍より六臍よりと鼻も貫してその血脉を百
日二百日のれ令ひて屠法の正教邪賊卑俗の業
人もうけゆゑ。されば極て体もててあけまへど
まぬと人食ひするなり。日本の人乃血脉の實体の血
脈也。氏神土產へ同宗同胞のゆゑ迷惑すれば
血脉りそへまへて被血脉よりうそ喫ひ候大俗

都六多那カタシマが身シムに

日本へ移代り系焉と第一かて守氏の祖神を立
て先祖の筋とちうど。その筋とつゞ血脉す。代々
を絶て家お族もくび継授と。もろもろとて。そもそ
もとつ士へすそせと。彦農工高アラシノウタカと仕シテお族
もあづ屬スルくなり。去にちうて氏神をあづ土產の駿
とち一ヌヤるぞ。人のせへ成揚アラカル者てもすももも不
和ハシマく全紙はらとて暖カミめ者を属スル。襟スル
ては別スルてお族人のよきよ居スル。至る氏姓を云
お族の多いある。それせむ四の基本と云れ

始まり去るゝ祖神氏神を唱えひへぞ利歎うづき
者ゝ儲渦て上人よまろひ。是輩々系図のそと
くまも。只ま罪亂の体罰をも。凶風をこのじよの也。
子孫ゆ一をちう本とむすむ神訓ハ法牙にむと
ろうから。士へ五を旨道にすり。令と義蹟よりれ。
先祖の神乃而伏清りる縁の肩組つゝするか枝へ。
その名桜と青紙のも。一度へ無事。金年く印く
桜木へ。先祖の神經とじみひへとこそできわく
あ。吳士乃一と手の厚くちう

農人よ経舟松よゆきくと。水よ保つ。旱の候してふ

を奉事れ。よぢれの祖神のえうせひ。お孫お孫と
工人へ今も形わは。夜、巫師よ。精、神共答川大工。朱だ。
金銀度あるつて。先祖工神の妙ひともの爲め
高ひ四民の下ひゆく。若の作あやう五穀工人織姫乃廉
細をも。上中下のふは定て。ひ是を傭さ。交易ひ
損利をひよ。をまれた産とね。色へ。其の玉産成
因合へねくと傭ひ。是終くと世人の用と西する。及
され朝夕秤の經まへ空もを考へ。算盤乃工夫み
猶朱と枝て出入内帳のト括し。かくにも換算とりとれ
ざあう。石代たり。高乃祖神の一とぢれの家のお孫と

足鹿アシカ

士農工商より社神、職神の筋因スジノイら人とも筋因スジノイ成
争うて筋因スジノイめでり奉スルにて其職ミカタがとつる事多
からくも職ミカタをとづれど。已ハ士農商ムツノミツノとおこなひもし
ク奉スル。一立アリからく。職ミカタのかそへ藝能テノウすと一分
の三ミツといふ事モノ。わが一公定準ハコドシスルと日年班ヒツニシラフの制シスメ
乃新言ハタモトを止マハくへます文藝モンガツのすそ見スズミ神訓カミヌシと等
てせばにうきとまんとどりて天皇アメノミコトの事モノもまか乃
幸ハラカ也ハ入ル。

御神輶ミツコ奉仕記ハシヨウの序柱シラカラ乃秘授ヒミツ大神タケミカツチ太玉司タケミタケミ

案主シナシの御ミツコ相承シヤウシヤウの極カタ秘ヒミツ凡人ハナレの私角ハシヨウとあ
事モノにわく。又潔ハシキうね口ハシモトとよきよくハシモトもあく。其外の
社稷カミツク法ハシモト乃一官ハシモト郡縣ハシモト守後ハシモトの勤ハシモト情ハシモト乃奥社ハシモトと一社
くの社ハシモトは隨役ハシモトの私角ハシヨウ家ハシモト。私角ハシヨウと神傳カミツクハ直ハシモト也。
其私角ハシヨウ凡下ハシモトに向ハシモトよかハシモトてハ位ハシモトをさぬハシモト。やさ
くハシモトと御ミツコハ神界ハシモトわから。我云所ハシモトハ表向ハシモトよ考
述ハシモト降除ハシモト乃佛像ハシモトとみて。恩流ハシモト初婚ハシモトの筋ハシモト乃陸敷利
益ハシモトの筋ハシモトよしハシモトトハシモト。宝廟社稷ハシモト乃神系ハシモトとか。產神
氏ハシモト神ハシモト乃神系ハシモトとつとハシモト。佛神神ハシモトに恐れて神領
神系ハシモトの荒ハシモトすもひとハシモトか。我土地ハシモトの神ハシモトよ訓ハシモト親ハシモト

かは是神をさうじてそぞれより日本をも見て我國をもと重いものづく神化ようびくて故に假よ日本殿をも神宮乃き遂にて神像とえ。それより產神氏神と称寄し。我家へに移るゝと移す。是唯一宗源の多祭りて雨宝童子の御よひあれ私神像と称寄もとひやけ社より三種の神器。家廟より高圓寺の岩戸の形容を。神纖數とぬへ。寒暑の淨衣と纖出。神馬とえて。神事の儀り備へまつ。是悉皆立神の御ひや。殿内より候人なり。と禁をあらひ。手をみて有色。方紙みて多祭の

神秘を。凡人漏さざりあるの。延喜或は十五月に外宮の佛像と遷十六日以内宮佛像を遷と云。法起出役一瞬より易変現妙術。卒余くしてあくまろそ側よして不測なり神徳なり。愚へ一向りす。是に人乃教よりす。されば化のこほんけり。彼經才詞章乃支那物識。世有饒舌のえ至学者。剣室滅相の塔に入。至誠感格乃格。よからむ。幽玄の妙用。無作の作。無依却てはけども。学業筆とつやと。理知をかりて神の宗氏人神よりそん。う徳とそ

海より。その邑に神有とかる者へ社より神幸とせよ
り。世財を神より拝て神の光を致ひ。罔穀あてうそ
滿く。森林乃寒を神久らとぞもとぞされ。がる
神造者の潤やと神社の滅却を願ひたり。日本乃
神教より奉足を以て之へ

日本始乃世纪屏奥佛はとちてつまで。近代の称書
は古くにほして残えひ紀文佛はを日本始より傳
きの權輿とせり。又室基本紀より天皇より真人至
るの教よりて神乃純宣を止とす。日本始より
往言たりと。又邪かどりからわく始の世纪を儒

より傳へて日本始の世よりは漏れぬれど。聖女
ふそ末代を薦て教ひ。聖女は。基本紀のあ天真人へ
あ邪かどりのか革。かどりと改す。今うはさくも自後
毀他ぢ。ばく相まきて日本始の代よりはの沙汰
一向。まことに世纪の儒老のか革。本紀の儒老のか革
ときどり。あ方ともつか革すてかどり。神の件はを極
きどりも有能。儒法を捨ててかどり。神の件はを極
道の助とすへ。かどて見ゆ。真の公は。真の儒は
ちり。じ神の防よ。あへ持て。此國よ西まで彼國か
邪うる。彼國に邪うては必ず正す。革す。神乃儒

道佛道はそのまことの教である風化なり。真言へ
天地一貫へ道理をわざわざあつて至るの事。總
のやれ別と云ふ事あるとゆくらむよう。今新しく是れ
今の大國は向。儒者も佛考も名のる。利のためよ
もより儒と云ひ佛と云ふ歸り泥。然ふのう考すか
狂よじゆの道と狂考すて被るもぞ口端一

日本之事。理根の神神神化とゆきもすへま耶天空
の道者ハ大神まへ直々託宣するて也せり。も忍
畏すりて神極よ近づくつゝに日本之神化をもく
ねり。已くらや得しまるがの道うとめやまう。天空乃

はと一つふきうの天主考支那考は日本の神乃道成
考そ理うすべどおゆきてのとく狼狽考のつまうり
海月ハ蝦夷と云て湯殿を肩が肩負て頭に目と備てゆふ。
彼の前は足と備てよく歩む。猿狹と云ふ歎リニ足右脚で左く
独立あれ。ひくとくさくと勤ひと。うれを日本に來て
鳥乳極絶者と云。我神よ儒と備。我神よ佛を備わきて
日本之神考ともいへ。朝りは無精日信と唱失ひ。トモ
支那の國が日本。天主の前は足とねきてお神考ひつま
み放く。云べ物を備え。うれを猿狹者と付古より我國云
來よへひし付と。すと舞

